2011 うらそえYA（ワイエー）文芸賞受賞作品

短編小説部門 煌賞（きらめき） 古蔵中学校三年 比嘉 武蔵（むさし）

『犬は祈る ～幸せの三つの条件～』

子犬だったときに、僕は桜ちゃんの家にやってきた。

ペットショップから外の世界へ。僕はタオルが敷きつめられたダンボールの中でぐっすり眠っていた。

目が覚めると、そこには桜ちゃんがいて、お母さんとお父さんがいて、桜ちゃんの弟の峻君がいた。

「おはよう、かわいいおチビさん」

桜ちゃんが、僕にそう笑いかけた。

そして、僕の名前決めでみんな盛り上がった。たっぷり二十分くらい議論されたあと、僕の名前は「クー」に決まった。四歳の峻君が、「くぅ～」とつぶやいたからだ。

桜ちゃんは、とても優しかった。みんなも僕をかわいがってくれたけど、やっぱり一番かわいがってくれたのは桜ちゃんだ。

僕のご飯を入れるのも、僕の白い毛にブラシをかけるのも、公園へお散歩に連れてってくれるのも桜ちゃん。

たまに、そんな桜ちゃんが泣いているときがある。そんなとき、僕は桜ちゃんの涙をペロッとなめて、そばに座る。すると桜ちゃんは泣くことをやめ、かわりに笑ってから僕を抱きしめてくれるんだ。

ビーフ風味のドッグフードもたっぷりもらい、新鮮な水もごくごく飲んだ。愛情を注いでもらえ、家族の員として受けいれてもらえた。何一つ不自由しなかった。

予防接種とかいうものは嫌いだったけど、それらのおかげで、僕は病気にもならず、元気にそだっていった。

花びんをわっちゃって、怒られたこともある。ちがう場所におしっこしちゃったときも。でも桜ちゃんは、叱ったあとすぐ笑顔になって、ボール遊びに移ってくれる。

今夜は満月だ。テレビを見ている桜ちゃんのそばで横になりながら、僕は窓から見える満月を見つめ、そしてこう祈った。

家族の員として、いつでも名前を呼んでもらえますように。

ずっとこの家で、みんなから愛情を注いでもらえますように。

最期の日、みんなに見守られながら天へと逝けますように。

僕のお祈りは、届くだろうか。満月は、今までと変わらない様子で月光を放っている。と、そのとき、鼻にほこりが入って僕はくしゃみをした。

桜ちゃんが、僕を見て楽しそうに笑った。

いつだっただろう。そんな平和な日常が狂った日は。

僕が家族になって一年目のある日、お母さんが泣いていた。その涙を、僕は慰めのつもりでなめた。

するとお母さんは、キッと僕をにらみつけると、手で乱暴に僕を押しのけた。

お父さんは、疲れきったようにソファーに横になっている。泣いているお母さんなど、目に入らないといった様子だ。桜ちゃんは二階でペンキョウしていることをしている。なぜなら、二受験生」という年頃だからだって。峻君は、隣の部屋でテレビゲームをしていた。

そして突然、いつも優しいお母さんが、お父さんにどなったんだ。

「あなたー！だらだらしないで、仕事を探したらどうなのよ！リストラされてから三週間もたっているのよ！このままじゃ、破産だわ！」

しかし対するお父さんは、

「ああ…」

と、生気のない声で返事しただけだった。

そこから、全てが崩れていった。

お母さんは、ひっきりなしにお父さんにどなっていた。時には、僕や桜ちゃんや峻君にどなることだってあった。そんなお母さんに対して、お父さんもどなった。

巻き込まれたくない桜ちゃんは、峻君と僕を連れて自分の部屋へと避難する。こんなことが毎日続いている。泣く気力もなくした峻君は、力無くベッドに倒れこんだ。

「峻、クー、大丈夫だからね…」

ベッドに上がって、僕と峻君を抱きしめながら、桜ちゃんは笑顔でそう言った。無理につくったような笑顔だった。

いつだっただろう。幸せが、音を立てて完全に崩れ去った日は。

僕は今、ダンボールの中でそう考えた。

ある日、お母さんが僕を指差してこうどなったんだ。

「この犬！こいつは私たちが苦しんでいるというときにのんきにエサを食ってんのよ！ドッグフード一袋が、どれくらいすると思っているのよ！そうよ、こいつのせいだわ！なにもかも！もう嫌！そんな毛玉のかたまり、見たくもないわ！」

すると、お父さんがテーブルをバンとたたいて立ちあがり、お母さんにどなった。

「クーのせいじゃないだろう！おまえこそ、アヒルみたいにガーガーわめいている暇があったら、パートの仕事を探すなりなんなりしろよ！」

「なんですって!?」

そして、言葉の戦争が始まった。

それから僕は、いきなりダンボールに入れられ、車に乗せられた。

たどりついたところは、人気も犬気もない、山のふもとだった。知らないにおいでいっぱい。巨大に成長した不安が、僕を襲う。

そしてお母さんは、乱暴に僕を車から降ろすと、再び車に乗りこんで去ってしまった。

僕は吠えた。お願い、おいていかないで、こんなところ、嫌だよ。桜ちゃん、桜ちゃん、助けて！

でも、誰も来なかった。

おまえは匹ぼっちだ。誰も来ないぞ。孤独で非力な犬め。ヒューッと吹く風が、そう言っているように僕は感じた。

やがて吠えることをやめた僕は、ダンボールの中でうずくまり、キューンと鳴いた。

いつだっただろう。満月にお祈りをした日は。

三つの幸せの条件を願い、祈った日は。

僕の祈りは、届かなかったんだ。僕は無情な満月を、神様を憎んだ。そして自分の運命を憎んだ。

僕が何をしたっていうの？ただ、犬として幸せに生きたかった。ただそれだけなのに。

悲しみで、息がつまる。尻尾に力が入らない。絶望とは、こういうことを言うのだろう。

桜ちゃんに会いたい。いつも優しい桜ちゃんに。

僕はあきらめない。絶対に、絶対に桜ちゃんに会うんだ――

いつだっただろう。僕がダンボールを抜け出した日は。

空腹に負けた僕は、悲しみで固まる体に鞭打って、近くの人間の町へと歩いた。

そこで待っていたのは、過酷な現実だった。

路地裏でゴミをあさり、人間に蹴られ、罵られ、雨に濡れながら、熱い日差しに照らされながら、雪で肉球が凍えながらも、僕は必死で生きてきた。

桜ちゃんに会えると信じながら。

ときどき、大きな人間の車が近くにやってくるときがある。そして、中から網を持った人間が出てきて、僕を追いかける。

僕は逃げる。傷ついた肉球の痛みを無視して、ただひたすら走るんだ。どこに行けばいいのかもわからないまま。

走ることでいっぱいの頭の中に、桜ちゃんの顔が浮かぶ。お父さん、お母さん、峻君の顔も。すごくはっきりと。

でも…どうしてみんな、怖い顔をしているの？どうして僕をにらんでいるの？どうして、僕に「孤独で非力な犬め」と叫んでいるの？どうして、どうして――？

気がつくと僕は、橋の下の川原にいた。どうやら、人間たちを撒けたようだ。でも僕の心の中にあるのは、逃げきれた喜びではなく、みんなに怖い顔をされた悲しみだ。

僕はこのまま、匹で死ぬんだろう。誰からも愛情を注いでもらえず、誰からも家族として受け入れてもらえず、匹ぼっちでのたれ死ぬんだ。そう考えると、胸がつぶれるような感じがした。

今日もいつもどおり、路地裏で朝を迎える。凍えた足で起き上がると、僕は車の排気ガスくさい大通りを歩いた。

人間たちに注意しながら、僕は公園へと向かう。そして、食べ物を探した。

僕の毛並みはボサボサだ。ノミだらけで体がかゆい。桜ちゃんのブラッシングが懐かしいな。そう思いながら、ゴミ箱をあさる。

結局、食べられそうな物は無かった。がっかりした僕は、公園を出ようとした。が、そのとき見知らぬ犬たちが現れ、うなった。

どうやらここは、彼らのなわばりだったらしい。僕はそのまま咬みつかれ、ひっかかれ、追い出された。

息も絶え絶えに、僕はどこか知らない裏通りにたどりついた。

しかしそこで待っていたのは安息ではなく、恐ろしい悪夢だった。

網を持った人間が、多勢いる。

うなっても、無駄だった。人間たちは、じりじりと僕に近づいてくる。僕は吠えた。すると突然、ヒュッと風を切る音がして、僕の視線に網模様が広がった。

人間たちが、バッと一斉に飛びかかってくる。僕はそのまま捕えられ、車の中に閉じこめられた…。

いつだっただろう、地獄にたどりついた日は。

捕らえられた僕が連れて行かれた場所は、冷たく硬いオリの中。その中には、たくさんの犬たちがいた。

必死になって吠えている犬もいれば、すみっこでぐったりしている犬もいる。種類もさまざまだけど、彼らには共通点があった。

みんな捨てられた犬たち、ということだ。

そしてこれから、殺される。

僕は殺される犬たちの、仲間入りを果たしたのだ。

でも、少なくとも匹だけで死ぬことはなさそうだ。慰めにもならないけど。

そして、もう桜ちゃんとは会えない。町にいればそのうち桜ちゃんに会えると思っていた。でも、その希望は断たれてしまった。

もう桜ちゃんに会えない…。

それから三日ほどたったけど、僕はまだ殺されていなかった。

だけど、死は迫ってきている。人間がオリの外の通路を歩くたびに、僕はドキッとした。

いつかはわからない。だけど、確実に近づいてきている死の恐怖。尻尾を巻いて逃げることも許されない。こうして、怯えながら過ごすしかないのだ。

そしてある日、運命の時はやってきた。

人間の二人が来て、オリの中を見渡した。そして僕の姿を確認すると、オリに入ってきて僕を連れ出した。

なんだ。結局、匹で死ぬんじゃないか。抵抗する気も失せた僕は、人間の腕の中でぐったりと力を抜いた。

そうしてくぐったドアの先。きっと僕を殺す道具が――いや、なかった。

かわりに、桜ちゃんたちがいた。

「クー！」

桜ちゃんは僕の姿を認めると、人間の手からひったくるようにして僕を抱きしめた。

「クー！寂しかったよね！苦しかったよね！ごめんね、私たち…本当に…ひどいことを…ぐすっ、本当に、本当に…ごめんね…」

桜ちゃんの言葉の最後は、涙声でかすれていた。峻君も顔を輝かせながら僕の背中をなで、お父さんも僕の頭をなでた。お母さんは目に涙を浮かべて、桜ちゃんと一緒に僕に抱きついた。

「ごめんねクー…。私、本当にひどいことを…。でも、お父さんが就職して、生活が安定したから、もう不自由なく暮らせるのよ」

「あのねお母さん！もしまたお父さんがクビにされても、もう二度とクーを離さないからね！クーは私たちの家族よ！」

「おいおい、勘弁してくれよ！俺はもう、クビにされたりしないからな！」

お父さんがそういうと、みんな笑った。僕は愛情をこめて、桜ちゃんの頬をなめた。

「もう離さない…これからはずっと一緒だからね！」

こうして幸せが再び幕を開けた。

いつだっただろう。祈りが届いた日は。

「…安楽死ですね、了解しました」

お医者さんが、そう言った。桜ちゃんは泣き崩れ、峻君はお母さんに抱きつき、お父さんは唇をかんだ。

一度は失った幸せ。でも再び取り戻した幸せは、長く続いた。僕の体がいうことをきかなくなり、もう十分生きたな、と思うまで。

桜ちゃんが僕を抱き上げた。僕は滝のように流れている桜ちゃんの涙を、ペロッとなめた。ちょっぴり塩辛い味が、別れの味だった。

「もっと一緒にいたかった…。ごめんね、私はダメな飼い主だったよね…クー、ごめんね…」

そんなことないよ。桜ちゃんは良い飼い主だよ。楽しいことも辛いことも、一緒にわかちあってきた。桜ちゃんは、僕の幸せを取り戻してくれた。

桜ちゃん、大好きだよ。ありがとう…。

すると桜ちゃんは、驚いたように目を見開いて、僕の顔を見た。でもすぐに顔をくしゃくしゃにすると、泣きながらこう言った。

「私こそありがとう」

最期にして、僕の言葉が一番伝えたかったことが通じたんだ。

種の壁を越えた絆を通して。

「では…」

お医者さんの声を合図に、僕を抱きしめる桜ちゃんの腕の力がグッと強くなった。

首の後ろに、チクッと何かが刺さる。そしてすぐに全身の力が抜け、抗い難い眠気が襲ってきた。

桜ちゃんの見守るような視線が、だんだんぼやけてゆく。お父さん、お母さん、峻君もぼやけてゆく。世界がかすんでゆく。

薄れゆく意識の中、僕ははっきりと、桜ちゃんの声が聞こえた。

「クー、今までありがとう…」

それが、僕が最後に聞いた最後の声だった。

いつだっただろう。満月を見上げて、お祈りした日は。

あの祈りは、満月がちゃんと神様に届けてくれたんだ。

家族の員として、受け入れてもらえた。

愛情をたっぷり注いでもらえた。

最期まで、みんながついてくれた。

三つの幸せの条件。犬としての幸せ。全ての願いが叶ったんだ。

ああ、くらいせかいが

ぼくをやさしくつつみこむ。

なつかしくせつないかぜが

こころをなでる。

満月さん、ありがとう。神様、ありがとう。

みんな、ありがとう。

そして桜ちゃん、ありがとう…。